

Title	経済的史観論の価値 (二)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.6 (1919. 6) ,p.773(109)- 784(120)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190601-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

し、戰時歐洲各國政府の資金上の缺乏は預金銀行業の發展を促進せしめ爾來流通外の貨幣は銀行の庫中に納まり而して爰に流通する所の信用貸出の基礎を成就せしめたり、是れ即ち通貨の大膨脹を發端せしめたる新習慣の根柢なり、印度及支那の如き隔絶せる諸國も亦預金銀行業の利用を學びつゝあるなり、此の預金銀行業ののたる恰も金供給の新源泉を發見したるに等しきなり、此の金供給の新源泉を利用する新しき方法として何物が發見されしやと問ふ者あらばそは戰亂の眞最中世界が樹立し又は促進せしめたる彼の十六世紀に於ける物價革命の均等物なりと答へんと欲するなり、

十四、物價の新平準に向て一步

先に進め

實業家は宜しく事實の真相を看取すべきなり
一九一三、四年頃の物價を謹奉し云爲するは宛

ら今日羅旬、ヘブリューの死語を話すと一般的なり、休戦以來我國の買手は兎角控へ又は見送りの態度を持つる一面物價に對して類例なき程の攻撃を加へたるも尙ほ且つ物價の後戻りせしこととは論ずるに足らざる程に細微なりし、其の然りし所以の理由は即ち我等が動すべからざる真理と認めらるべき新しくして高き物價の平準に出會したるに在るなり、然り而して巧者と稱せらるゝ人は徒らに見送る人には非ずして克く新物價の事相を看取し而して之れに策應して活動する人なることを知り得べし、

經濟的史觀論の價値(二)

野村兼太郎

三

第一の問題たる人種的感情とは如何なるものなりや。且つ亦かゝる感情は如何にして存在するや。吾人が劣等民族に對しては、一種の誇負を感じ、優等民族に對しては、一種の嫉妬を感じるは如何なる理由に基けるや。

民族は個人に依つて成立す。換言すれば各個人はある種族に從屬すてふ意識を有す。吾人日本人が黄色人種にして、他の人種にあらずてふ意識は、他の人種に對して誇負し若しくは嫉視する原因なり。斯如き意識——己と同一種族に屬する者に對しては親しみを感せしめ、他種族に屬する者に對しては是を排せんとせしむる感

情の根本は各人の有する自立排他の思想に存す。マックス、ステイルナーが「此の世の光を浴する瞬間より人間は自己を始めすべてのものが共に相錯雜せる混亂の内より、自己を發見し、且つ是を保持せんことを欲す。然るに其の幼き者の接觸するすべてのものは相次で其の攻撃より自己を防衛し、それ自身の存在を擁護す。從つて各自はそれ自身をば守護し、同時に他のものとは絶えず争闘するが故に、自己保存の戦は避くべからざるものなり。」と云へるは、其の言極端なるが如しと雖も亦一面の眞理を含まざるにあらず。ステイルナーの如き極端なる個人主義者にあらずとするも、少しく冷靜に人情世態を觀察する者は、彼等人類が如何に甚しく自己を主張せんとしつゝ、ある事實に、驚嘆の聲を發せざるを得ざるべし。營利に汲々たる商賈の輩は問ふべくもあらず、陽に博愛を説ふる者にし

て尙ほ親子相争ひ兄弟相闘ぎ、吾人をして耳を掩ひ目を閉ぢざるを得ざらしむるに至るものあり。殊に十八世紀以後自我の觀念著しく發達するや、斯如き外部的利己以外に更に内的精神的利己の色彩甚しく濃厚になるに至れり。今や吾人は殆ど多くの場合に於て自己を中心として行動し思考す。アダム、スミスが「人間は殆ど絶えず彼の同胞の援助を借る、されど其の援助も人々の恩惠 Benevolence にのみ豫期するは無益なり。若し彼が彼の利益のために人々の自愛 self-love を利益し、且つ彼の要求せることを彼のためになすことが人々自身の利益なることを示さば、更に説得し易かるべし。」と云へるは、人間の利己的方面を説破するものと云ふべし。

斯如き自己を愛する思想に二個の方面あり。即ち一は積極的にして他は消極的なり。前者は自己を主張し他人をして是を承認せしめんとす

を説明するの餘裕を有せず。クロポトキンはダーウイン、ワルラスに依つて説へられたる生存競争の學説が其學徒に依つて益々狹義に解釋せられ、私利私欲に依つて各自相呑噬するを生物學上の原則として崇敬するに至れることに反對して、動物の世界に相互扶助の事實存在せるのみならず、人類の間に於ても遠く文化の發達せざりし以前より、現代文明社會に至る迄、相互扶助の事實あることを例證せり。ダーウインの所説が餘りに狹義に解釋せられたることは事實上承認せざるを得ず。すでにダーウイン自身も動物界に於て存在の相互扶助を認め、最も同情ある仲間 members を多數に有する社會は最もよく繁榮し、多數の子孫を有するに至る。」と云へり。斯如き相互扶助の事實の根底に於て如何なるものを發見し得るや。吾人は少しくクロポトキンの示せる相互扶助の事實に就て、其の説

るもの、假りに是を「自己主張」と名付くれば、後者は「自己保存」とも稱すべく、自己の持續を念とし、他より來る一切の障害を排せんとするものなり。勿論實際上に於ては判然と兩者を區別することを得ずと雖も、吾人がこゝに斯如き區別をなさんと欲する理由は、後者の利己即ち自己保存の觀念が往々にして利他と混合せらるゝが故なり。吾人は事物を解釋するに一々惡意に曲解する必要なければ、又反之一々善意に取らざるべからざる義務もなし。すべてあるが如くあるがまゝに觀察するを必要とす。スミスが物品の交換を欲する者は「余の欲するそれを余に與へよ。然らば汝は汝の欲するこれを得べし。」と申出すべしと云へるは果して利他的なるか或ひは又利己的なるか。こゝに於て余はクロポトキンの「相互扶助論」"Mutual Aid"を想起せざるを得ず。こゝに一々同氏の相互扶助論

くところを尋ねん。

クロポトキンは歐羅巴中世に於ける都市生活を嘆美し、其の社會状態を列記し、「吾人が中世都市を知るに従ひ、それが單にある政治的自由保護のための政治的組織にあらざるを知る。それは村落の社會よりも遙かに大なる規模を有し、生産消費のために且つは共同の社會的生活のために、國家の⁽⁴⁾の羈絆を脱し、各個人の各異れる創造的才能——美術に、工業に、科學に、商業に、政治的組織に、各々其の才能を充分自由に表現せしめんとして、相互扶助 mutual aid and support の密接なる合同を組織せんとする計畫なりき。」と云へり。中世歐洲の組合組織が果してクロポトキンの想像するが如く、理想的のものなりしや否や。斯如きは相互扶助の思想よりも寧ろ自己の利益を保持せんとする自己保存の思想より生じたる組織にあらざることなき

や。更にクロポトキンが幾多の例證を示して、近世に於ては貧乏人の内に眞の相互扶助の親愛なる感情 the kindly feeling を認め、是が將來に於ける復活を希望せり。裏店社會 Shim 村落生活等に於て一種の同情相互扶助の存することは事實なり。然れども斯如きは單なる生物的同情に過ぎざるにあらずや。即ち他人の缺陷に對して、同じく其の點に於て弱者たる自己を顧みて相共通する憐憫の情を惹起するものなり。勿論斯如き感情は輕視すべきものにあらずと雖も、斯如き自己の缺陷を思ふて他に同情し、若しくは一致團結せんとするは寧ろ自己防禦の擴張されたるものに過ぎず。若し自己に何等の缺陷なしとせんか、そは富貴なる婦女が乞食に數錢を投するに等しく、彼女自身の心を満足せしむる行動と相去ること甚だ遠からざるべし。

以上論じ來れる如く、吾人が利己と利他とを

比較する時、常に前者の遙かに後者より強烈なるを見る。會々利他的行動をなす者ある時は世舉つて是を賞讃し、新聞紙は誇大の筆を弄して書き立つるを見る。是に依つて見るも如何に利他的行動の稀少性の大なるかを推知し得べし。而も斯如く利他的行動と稱せらるるもの、内にても、往々にして其の行動の單なる自己満足、換言すれば虛榮に出でたるにあらざるなきやを疑はしむるもの多し。(勿論嚴密に解釋すればクリストの行動と雖も自己満足と云ふことを得べし。されどこゝにては斯如廣義に解釋せず)然らば斯如く利己を中心とする自己が如何にして今日見るが如く共同生活をなすに至りたるや。余はこゝに極めて簡單に原始民に就て一瞥せんと欲す。

自然對文化と云ふも吾人の考ふるが如く、如斯相異なるものにあらず、現在の人類を稱して

文化人 Kultur Mensch と云ひ、原始人を指して自然人 Natur Mensch と云ふも、其の間判然區別すべき何ものをも存するにあらず。自然人を動物と區別すべき分界線を發見し得ざるが如く、文化人と自然人とを明瞭に區別し得る境界を認むることを得ず。然乍らこゝにかゝる問題を提出したるは、俄に是が解決を求めんとするにあらず、唯往々自然人と文化人とを全く別個のもの、如く思惟し、若しくは人類は動物の一種にあらざる如く思惟する思考方法を排せんと欲すればなり。人類と雖も生物なる以上生物學的原則に支配せられざるを得ず。「生めよ繁息よ」とはあらゆる生物に對する神の言葉なり。原始民族が一夫一婦 Monogamie たりしや、一夫多妻 Polygamie たりしやに論なく、意識的たると無意識的たるとを問はず、常に絶えず生殖し來りたることは疑ふべからざる事實なり。而してヅ

ントの云へるが如く、「持續せる文化的形式は結婚と家族となり、其の或ものは自然的の性的結合として、或ものはその必然的產物として」斯して原始民族は進化の一階程に其の第一歩を着けたるなり。然れども人類の共同生活を説明するに單に性的本能のみより始りたりとするは未だ充分なりと云ふべからず。クロポトキンの云へるが如く、原始人が家族を形成するに至れる迄は幾多の長日月を要したるにもせよ。又彼等相互の愛情が單なる生物的愛——性的愛のみたりしにもせよ。彼等がよし一時的なるにもせよ、斯如き關係より共同生活を送りたる時、彼等相互の間に各自の自己保存に對して、大なる便宜を與へたること疑ふべからず。然らずんば恐らく其の共同生活は現在迄持續せられざりしなるべし。更に極端に云へば生殖作用の如きは自己保存の一延長なりと解釋することを得べし。自

己保存の思想は斯くして家族を作り、家族は一社會を組織せんとする前提となる、而して個人は一家族の一員、一國家の一員、一民族の一員たるなり。個人は家族、國家、民族の根本なり、而して各個人は自己を保持するの念慮極めて強し。斯してある家族に屬する個人が他の家族より自己の家族を愛するは自己保存の原理より云ふも理の當然なり。自己の屬する國家を愛するも、果た亦自己の屬する人種、民族を愛するも當然の歸結なり。

然らば斯如き民族的偏愛は果して經濟的史觀論に對して反對的要素なりや。

自己保存の意志は少くとも原始時代に於ては、全然外的身體の維持にありたるなるべし。現在に於てすら尙ほ自己の生活を維持すること、一般に於ては最も重大なる問題たり。自己保存の第一は先づ自己の經濟的獨立にあり。故

に家族の存在するは少くとも自己の經濟的獨立を維持し、自己を満足せしむるに便宜なるに依つて持續され、國家は自己の經濟的獨立が保證さるゝ限りに於て存續さる。若し國家にして自己の經濟的獨立——生命の維持を許容せざるとせば、其の國家は存在する價值を有せざるなり。否斯如き國家は必然的に滅亡に歸すること一々歴史に徴する迄もなく明白なる事實なり。國家の存亡、社會制度の變遷は少くとも個人の經濟的獨立を保持するや否やに關すること極めて大なり。従つて經濟的史觀論は少くとも此の點に於ては許容することを得べし。

然らば何等個人の經濟的獨立に支障なきにも拘らず、尙ほ人種的差別をなすは如何。

吾人が日常生活に於て、最も密接なる關係を有するものに對して愛着の念を催すは、否定し得ざる事實なるべし。所謂使ひ慣れたる品、買

ひつけたる店舗等に對して、吾人は一種の familiar なる感情を有す。斯如き感情も亦其の根本に於て自己てふ觀念を否定し得ずと雖も、余はこゝに二個の異なる原因ありと思惟す。即ち(一)はそのものを理解せること、(二)は生物的愛情なりとす。自己の買ひつけたる店舗は他の店舗に比して遙かによく理解せり。兩親兄弟に對しては他人よりも遙かに生物的愛情を感ず。實際上兩者は相混合して惹起するは論を俟たず。時としては理解なき兩親兄弟に對しては理解ある他人よりも愛着を感ずること薄きことあり。然乍らよし理解ある友人なりとするも、一朝自己と相競争する地位に立つ時は、寧ろ是を憎惡するの傾向あり。こは明かに積極的自己

即ち自己主張に對して障害を來たすが故なるべし。勿論斯如き憎惡を感ぜざる者もあるべしと雖も、こゝには斯如き聖人君子を取扱ふにあら

ずして、一般普通の尋常人をば問題とするなり。従つて彼等の内に往々にして起る自己の愛人に對する嫉妬の如きは、理解の力以上に其の生物的愛情が強烈になりたる場合なり。

以上は個人相互の問題なれども、亦同一の理論は民族相互にも適用し得べし。白色人種が他の有色人種を輕侮するは、單に彼等が生物的於持を有するが故のみ。同人種間に互に愛着を感ずるは、單に同一色の皮膚を有し、同一の血液其の體中を流るゝと意識することより生ずる生物的感情に過ぎず。故に異人種間なりと雖も、相互よく理解するに至らば相團結すべし。況んや個人間にありては時に同人種の者以上に愛着心を感じることあり。

然乍ら兄弟内に相闘ぐ時と雖も、外の侮りを受くるや、翻然として相協力し是に當る。開戦前の獨逸と開戦後の獨逸を比較する時は、這般

の消息を知るに足るべし。即ち自己自身の侮りを受くるや自己の怠慢を棄て、外に當るべく、一家恥を蒙る時は家族協力して是を防ぐべし。一村、一町、一市、一國、盡く然らざるはなし。一民族他の民族の侮辱を受けんか、恐らく其の民族擧つて是が雪辱に努力すべし。然るに今各人種の一致を要求するとせよ。假りに經濟的反對理由を排除するとするも、人類全體の大敵現出せざる限り、或ひは人類のすべてが聖人君子たらざる限り、不可能なる要求と云ふべし。よし名稱的一致は期すべしとするも、實際的一致は期すべからず。唯に人類の一致の不可能なるのみならず、平等の待遇を與へることも亦期待すべからず。然るに一國一家の一致團結するは、常に其の危急存亡の秋たり。平時にありては却つて血肉相食むの極端を演ずるに至る迄、自己を維持主張せんとす。こゝに奇異なる事實の對

照を見る。自己保存の危殆に瀕する時は、自己と利害を共通にするものと一致共同して他に當らんとすれども、自己保存の未だ可能なる時は是を全ふせんと欲して、自己と利害相通するものを相敵視す。例へばかの勞働者が其の勞働の供給甚だ大なるため、各人相爭ふて低廉なる賃銀にて自己の勞働を給與せんとす。然るに若し勞働の供給益々大にして、賃銀益々低下し、遂に自己保存に耐へざるに至らば、彼等は一致團結して其の資本家に對抗するに至るべし。

以上述べたる如く、吾人は他を理解し、若しくは生物的感情よりして、何等經濟的原因なきに拘らず、相愛着する特種の感情を有するに至るなり。すべての他の條件にして同一なる時は理解の大なれば大なる程愛情強く、密接なる聯結——生物的感情の強大なればなる程愛着甚し。

斯如き感情は經濟的史觀論に對して、如何なる影響を與ふるや。經濟的史觀論は斯如き感情を無視して反對の斷案を下すものなりや。

エンゲルスが云ふが如く、「從來の歴史は階級戰爭の歴史なり。」其の原因は「當時に於ける經濟狀態 economic conditions」にあり。勿論斯如く階級戰爭存在せんにはすでに階級たるものゝ發生せる後なるを必要とす。すでにエンゲルスも其の著「社會主義」Socialism, Utopian and Scientific. の第四版以後に於て、「原始的社會は例外として、」"with the exception of primitive societies." と云ふ制限を附したり。即ち原始時代にありては自己を維持するに何等の團體を作る必要もなく、更によし團體を作りたるにもせよ、彼等相互の間に何等利害の相關するものあらざる限り爭鬪は惹起せざるなり。家族、村落等發生せる後と雖も、彼等にして經濟的獨立を

個々に保持することを得たる間は、何等階級的組織は生ぜざりしなり。勿論男女を以つて最も原始的なる階級なりとせば、社會は最初より男女階級の爭鬪とも解することを得べし。されどこゝには斯如き廣義の意味を云ふにあらず。

元來爭鬪の原因となるものは常に兩者の利害好惡の相反することなりと雖も、是を(一)生物的感情、即ち單なる憎惡、慾望、冒險心等より生ずるものと、(二)經濟的原因、——自己を維持せんとするより起るものとに區別し得べし。換言すれば前者は「自己主張」より、後者は「自己保存」より生ずるとも云ふことを得べし。但し自己主張より生ずるは單に生物的感情より發するものゝに止らず、此の事に關しては尙ほ後節に説く所あるべし。

こゝに於て問題は是等兩種の原因が矛盾するや否やに歸結す。

近世社會に於ける階級戦争は生産手段の所有者たる本資家と直接生産者たる労働者との間に惹起さる、即ちマルクスの名付くる所に依れば Bourgeoisie と Proletariat との争闘なり。斯如き現在の事實として現出したる社會的争闘の原因は、其の一方が自己保存を危くしたるより生じたること論なし。被掠奪階級たる労働者は掠奪階級たる資本家に對して、彼等自身が維持せらるゝ範圍に於て共同團體を組織したること前述の如し。然るに彼等自身の血と肉とよりなる労働の生果を不當に掠奪せらるゝに於ては、自己保存の必要上相衝突するは當然の趨勢なり。是と同時に彼等労働者相互に於て、及び亦資本家相互に於て、各々其の利害を共通にすることに依りて、よりよく理解し、より多く同情し、これに愛着しかれを憎惡する生物的感情に影響さる。斯して兩種の原因相待つて階級的争闘を助

成す。時に資本家にして労働者に同情する者なきにあらず。然れども彼が資本家たる地位を棄てざる限り、若しくはすべての労働者をして經濟的獨立の保證を得しめざる限り、こは彼一個の自己満足より生ずる同情と實質上何等相違する所なきなり。

更に歐洲に於ける這般の大戦の眞原因は、是を一カイゼルの野心に歸するは素より滑稽なりと云ふべし。余はブーゲンと共に高度なる資本主義的發達を遂げし國々にありては、現代の貿易は最早個人的に經營せらるべき平和的事業に非ずして、國民と稱する大團體に依つて經營せらるべき武力的事業と化し去りたりと思考するが故に、國家的道德の完全ならざる今日、素より斯如きは遠き將來に於ても、個人的道德の完全せざる限り、空想家輩の痴夢に過ぎず。這個の世界大戦の原因は是を經濟的原因に歸せざる

を得ず。是に對して自國を愛する念慮はすでに述べたる理由に依りて、益々是を助成するに至れり。尙ほ亦これ以外に精神的原因あるを全然否定する者にあらず。然れども斯如き精神的面に關しては後に述ぶる所あるべければ、こゝには更に論究せず。

由之觀之社會組織の變更は少くとも近世にありては、是を經濟的なる階級戦争に歸するを得べく、一般的社會的事變は其の根本に經濟的色彩の著しきを見るべし。

以上論じたる如く、吾人は自己保存てふ觀念より出發して、人種的感情も要するに自己を中心とする思想の延長と生物的感情の發達とに外ならざることを知り。個人を尊重する議論は恰も個人を没却するが如き形式を現せるが如し。然乍ら素より歴史上偉大なる人物が社會組織變更に多大なる影響を與ふること論する迄も

なし。と同時に斯如き偉大なる人物を産出せる當時の社會的狀態、經濟的境遇も亦彼をして、かくあらしめたる一大原因たること否定し難し。余は精神的問題を研究する際に再び此の問題を論ずる必要あるが故に、是亦これ以上論究せざるべし。唯余は經濟的史觀論の根據を以つて、寧ろ各個人の自己に求むるが故に、經濟的史觀論が人格を無視するものなりてふ攻撃に對しては、寧ろ人格尊重の結果にあらずやと思惟する結論をのみ表明するに止めん。

余が第一の問題たる人種的感情と經濟的史觀論との關係を論じて、其の世界觀構成に個人主義的色彩を強調するの止むなきに至れり。而して其の個人主義的思想は經濟的史觀論の基本的要素にして、尙ほ亦更に人類文化の發展に對して、何等矛盾する所なきものなることに關しては後節に於て説く所あるべし。

次に余が本節に於て暫々言及したる生物的感
情と經濟的史觀論との關係に就て論せんと欲
す。

(附記) 前號にて人種學的感情及び生物學的感情となしたる
は、すべて人種的感情及び生物的感情の誤謬なり。

(註一) Max Stirner:—"The Ego and his Own"(trans. by
S. T. Byington.) p. 9.

(註二) Adam Smith:—"The Wealth of Nations"(Ed. by
E. Cannan.) p. 16.

(註三) P. A. Kropotkin:—"Mutual Aid," popular edition,
p. 13.

田中孝一郎氏「ソロキヤムの史觀」(三田學會雜
誌第九卷第四號所載)參照

(註四) Darwin:—"The Descent of Man," 2nd edition,
p. 163. (前掲 Spargoo著書八二頁より引用)

(註五) Kropotkin:—op. cit p. 141.

(註六) W. Wundt:—"Elemente der Völkerpsychologie,"
Zweite Auflage, S. 13.

(註七) Engels:—"Socialism, Utopian and Scientific,"(Pub.

by Charles H. Kerr of Com.)

(註八) E. Bernstein:—"Evolutionary Socialism,"(trans.
by E. C. Harvey.) p. 18. Note.

(註九) ditto. p. 18.

(註一〇) Boudin:—"Socialism and War,"河上博士抄譯「
社會主義者の觀たる世界大戰の眞因」に依る。社會
問題研究第三冊、第五冊所載

(未完)

アダム・スミスの價值 論に就いて(一)

加 田 忠 臣

一、スミス價值論の要領(本號所載)

二、スミス價值論の本質

三、勞働價值説に於ける勞働の意義

(一)

「アダム・スミスは其時代に於ても組織的學理

の緻密なる建設者に非ず。彼が他の時代に其の
生を享けたりとするも同一の運命に逢着せしな
るべし。彼は家を見て町を見ず木を見て森を見
るに失敗せり。されど彼が家と木とに精通せる
は驚嘆に値す」とのダヴンポートのスミス評は
少くとも彼の價值論を通讀せる者の肯ずる所な
るべし。(註一) スミスの價值論は國富論中最も
難解なる部分の一にして、其要領を捕捉するだ
に容易の業にあらず。本篇に於て論せんとする
所は複雑錯綜せるスミスの價值論の眞意が何處
にありやを決定するにあり。されば、以下予は
先づスミスの所論を正確に記述し、然る後他の
研究資料を參照してスミスの眞意を明かにせん
と欲す。(註二)

(一) Davenport: Value and Distributi. n, p. 29.

(二) アダム・スミスの價值論に就きては本誌第五卷第三
號アダム・スミス記念號に氣賀教授の「アダム・スミ

スの價值學説」あり。又本誌第七卷第一號に河上教授
の「アダム・スミスの價值論に就いて」なる論文あり。
故に余は記述的部分は極めて簡單となすべし。

(二)

價值及び價格に關するスミスの説は之を四部
より成立すと見ることを得べし。第一は價值の
成立、其二は價值及び價格の標準、其三は價格と
所得分配との關係、第四は分配論其ものなりと
す。價值の成立要素と之を秤量すべき標準尺度
とは別種の概念なり。さればスミスは國富論第
一卷第五章に於て價值は勞働によりて發生すて
ふ命題を出發點として交換價值の標準論に同意
全部を費せり。然るに、價值の成立と價值の秤
量の標準とは其内容を異にす。價值秤量の標準
は、スミスに據れば、勞働、穀物又は貨幣なり。
然るに價值の成立は勞働を以て基本的要素とな
すなり。其分配論と關係を有するは勞働に依り